ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.21 No.10 October 2020

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

10

CONTENTS

- 巻頭言
  日本文化との距離感
  ／永尾教昭 …… 1
- 日本語教育と海外伝道（27）
  新型コロナウイルスと日本語教育①
  ／大内泰夫 …… 2
- キルケゴールで読み解く 21 世紀（25）
  孤独―カフカとキルケゴールの場合―
  ／金子　昭 …… 3
- イスラームから見た世界（6）
  天理教とイスラームの出会い④―天理教学と宗教学のあいだ
  ／澤井　真 …… 4
- 伝道と翻訳―受容と変容の“はざま”で―（25）
  仏典翻訳の歴史とその変遷⑧
  ／成田道広 …… 5
- 遺跡からのメッセージ（62）
  弥生人は龍を見たか？
  ／桑原久男 …… 6
- コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ関係試論（36）
  ヨンビ＝オパンゴ４代大統領の軌跡②
  ／森　洋明 …… 7
- ライシテと天理教のフランス布教（22）
  20 世紀のライシテ①
  ／藤原理人 …… 8
- コロンビアへの扉 ―ラテンアメリカの価値観と教えの伝播―（12）
  5. コロンビアの体質３
  ／清水直太郎 …… 9
- ヴァチカン便り（46）
  聖ソフィア教会の今―財産と信仰をめぐる話
  ／山口英雄 …… 10
- 思案・試案・私案
  「碍」の字表記問題再考（９）
  ／八木三郎 …… 11
- 2020 年度公開教学講座の案内 …… 12

巻頭言

日本文化との距離感

おやさと研究所長　永尾教昭　*Noriaki Nagao*

天理教を海外で広めるに当たり日本人布教師が陥穽にはまりやすいのが、教えそのものからではなく、日本の文化や伝統・習慣からきたものを、天理教の教理上必要なものと思ってしまうことだろう。極論すれば、日本の習慣から来ているだけのものであれば、必ずしもそれを海外で用いる必要はない。時にはそれを押し付けることによって、信仰するためには日本人にならないといけないのかという反発を現地の信者から受ける恐れもある。しかしその一方で、天理教は日本で始まったのだから、当然祭儀をはじめ多くの形の中に日本文化由来のものはあるわけで、それをすべて排除することは不可能だし、またそれははたして正しいことだろうか。

かつて筆者が所長を務めた天理教ヨーロッパ出張所で、国内の一般教会のように親神、教祖、祖霊（みたま）の三社を祀るようになって以降のことである。祖霊を祀ったのだから、祖霊祭を勤めるべきとなった。その際、何月に祖霊祭を執行するのか、検討した。天理教教会本部や国内の教会では、通常３月と９月に勤める。これは、恐らく、天理教教理から来たのではなく、日本の彼岸の習慣から取られたのだと思う。

一方でヨーロッパでも、11 月２日はカトリックの「死者の日」だ。いわば亡くなった人を偲ぶ日である。この日に墓参りする人も少なくない。前日の 11 月１日は聖人を偲ぶ「万聖節」である。ちなみにメキシコなどは１日を「死者の日」としている。前日の10月31日夜はアメリカではハローウィンと呼ばれる行事があり、今ではヨーロッパにも逆輸入されている。

このハローウィンや「死者の日」は、ケルト民族の習慣から定着したもので、キリスト教本来のものではないという説が有力だ。キリスト教由来のものならば、やや抵抗があるが、そうではなく元々のヨーロッパの習慣なので、ヨーロッパ出張所では祖霊祭は「死者の日」の行われる 11 月でも良いのではないかという議論になったことがある。つまり日本では日本の習慣である彼岸に因んで祖霊祭をするのだから、ヨーロッパはヨーロッパの習慣に合わせればいいとも考えられる。宗教行事などを、その国の習慣に合わせてある程度アレンジしていくのは、海外で教勢を伸ばすためには大切な点でもある。天理教教会の月次祭は定めた“日”で勤める決まりだが、海外教会の多くが日曜日に執行するのはその一例だろう。

ただそうすると、天理教は外から見ると、一つの宗教でありながら日本とヨーロッパで祖霊祭の執行月が違うのか、という疑問も持たれるのではないかとなり、結局、日本に準じて３月と９月とした。

些細なことだが、事務的なことで言えば墨書という各種願書の提出方式などは、外国人教会長どころか今や日系人にも不可能だ。そうは言いながら、実は布教戦略上、日本の習慣をむしろ取り入れていったほうが良いという場合もある。たとえば、コンゴなどのようないわゆる発展途上国では、日本人が「この国では暑いから、ハッピは必要ない」と言っても、彼らは着たがる。朝夕のおつとめで着用する教服と呼ばれる黒い衣装なども同じだ。それは、彼らに日本に対する憧れがあるということと、教会本部をはじめ日本ではそうしているから、ハッピ着用が信仰者のあるべき姿だと思っているためだろうと考えられる。

要するに日本文化との訣別ではなく距離の取り方だろう。何が正しいかは一概に言えない問題であり、国と国の関係（例えばかつての韓国のように日本式のものが許されない場合がある）なども考慮しながら、常に議論しなければならないと思う。

新型コロナウイルスと日本語教育 ①

天理教語学院
日本語教育センター主任
大内　泰夫　*Yasuo Ouchi*

始まったウイルスの脅威

2019年11月末頃、中国の武漢市で原因不明のウイルス性肺炎のニュースが流れ始めていた。しかし、誰もがまだ日本には来ていないと悠長に構えていた。SARSやMERSの時のように日本では感染拡大も起こらないし、大したことはないだろうと思っていたのではないだろうか。しかし、年が明けて時間とともに連日、ダイヤモンドプリンセス号をはじめとする新型コロナウイルス関連のニュースが流れ始め、危機感を感じるようになった。筆者の勤務校でも3月の卒業式は式だけを行い、祝賀会は中止になった。その後、3月下旬に新型コロナウイルス感染によるタレントの志村けんさんの死亡ニュースが出て、多くの人が危機感をさらに強くしたようにも思う。筆者は海外の拠点にいる天理教青年会・婦人会の海外人材派遣生たちと時々、連絡を取っていたが、3月中旬、すでにニューヨークでは外出制限も出ており、学校ではオンライン授業を検討していると知った。また中国大陸で日本語教師をしている人からの情報もあり、海外ではオンライン授業というものが始まっているのだと知った。漠然と、これから日本もそうなるのではないかとも感じた。3月8日に天理教語学院の卒業式を終え、その後、慌ただしく天理教語学院も天理教海外部もおやさとやかた東右4棟へ移転した。パリでは例年3月中旬に行われている日仏文化協会の日本語教師養成講座は新型コロナウイルスの影響で中止になったと連絡が入った。

混乱する現場

3月の卒業式を終えてから、連日の新型コロナウイルス関連のニュースを見るたびに、新学期を迎えられるのだろうかと誰もが考えるようになっていた。4月の入学式までに来日できない留学生もいるようであり、一時帰国していた留学生も再来日できない可能性があり、連日、国の動きを注視するしかなくなってきた。結局、例年4月6日に行われる入学式は一旦13日に延期したが、入学式自体も執り行わず、来日できた留学生だけで全体オリエンテーションという形で行うことになった。日本語科もおやさとふせこみ科もそれぞれわずか9名だけであった。開校以来、こんなに少ない人数は初めてのことである。しかし、まだ来日の可能性もあって海外で待機している者もおり、その対応をどうするか話し合いが何度も持たれた。遠隔授業を行うにしてもどのような形で行うか、皆、初めてのことで戸惑うばかりだった。来日できる可能性が残されている間はオンライン授業を行うことになった。結局6月末をもって今年度は日本語科定員40名中9名、おやさとふせこみ科が定員20名中10名の留学生が在籍することになった。例年の3分の1の学生数である。

オンライン授業

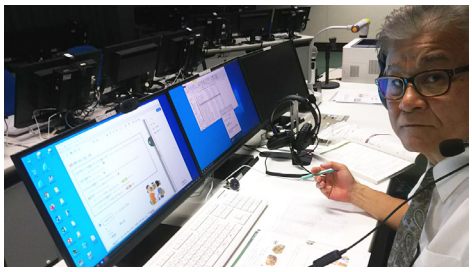
先が見通せない状況の中、ニューヨークに派遣されている海外人材派遣生から「Zoomでオンラインの授業を4月から始めるので、今、準備や練習をしている」と3月下旬にメールがあった。私がZoomのことを知ったのはこの時が初めてだったが、調べてみると遠隔のTV会議システムのことだった。すぐに18年前にTV会議システムを使って大学院の論文指導を受けていた時の記憶が蘇った。当時、SkypeもLINEもない時代でネットワークも光ファイバーではなく、ISDN・ADSL回線が主流の時であって、富士通が開発した「Join Meeting」というソフトを使っていた。機能的には授業参加者の映像やWord書類などを表示することができた。遠隔地においてリアルタイムで授業を受けられるという画期的なものだと当時、思っていたが、Zoomも同じものなのだとすぐにわかった。しかもZoomは誰でも自由にダウンロードすることができ、複雑な設定なども必要なく、さらに機能も数多く備えていることもわかり、今の状況を解決するのに十分役立つと思った。それで早速、校内のメーリングリストにZoomのテストをするので、スマホやパソコンでアクセスして協力をお願いした。しかし、予定した時間に皆が一斉にアクセスすると、ワイワイガヤガヤという感じで、ノイズも多く、これを授業で使っていくには、機能に習熟し、練習もしなければならないとも感じた。

ネットワークへの負荷

Zoomの機能や使い方について十分活用できるという手応えは得られたが、音声や映像を絶えずやり取りすることになるので、ネットワークへの負荷が心配になり、職場のインターネットの根本であるルーターやL2スイッチなど、機器のパケットの流れも確認して、できるだけ分散して負荷がかからないように設定もやり直した。オンライン授業を進めていく上で機器を整備していくことは大事なことだ。サーバーやネットワークの回線など急に負荷がかかってしまえば、たちまち支障が起こる。天理大学でも、すでに教職員の急なアクセス増加によりつながりにくいなどの障害も起こっていた。

オンライン授業といえば「Zoom」？

新聞でも4月頃から「オンライン授業」という言葉が増え、オンラインといえばZoomを使うものだというような風潮さえ起こっているように感じた。筆者も4月中頃、「基礎日本語A(会話)」の授業をどのように行っていこうかと構想を練ってはいたが、オンライン授業について何か大学側のサポートや指示があるものだと思い、それを待っていた。しかし、連絡はなかなか来ず、噂として耳に入ってくることは混乱している様子ばかりであった。結局、オンラインで授業を行うように指示はあったが、具体的なサポート体制などは示されず、授業を担当する教員に任せる形になったようだ。対面授業をすることができない以上、パソコンやネットワークを使い、何とかするしかなく、そんな状況で考えたのは授業動画を作成し、YouTubeを使って配信して、その後Zoomを使ってリアルタイムで学生達にも集まってもらうというやり方だ。つまり通常、授業で行う説明などは動画にして、都合のいい時間にYouTubeで視聴してもらい、通常の対面授業をしている時間にZoomで集まってもらい、口頭練習や質疑応答などを行うという形式を採用することにした。



オンライン授業前の筆者

孤独―カフカとキルケゴールの場合―

おやさと研究所教授
金子　昭　*Akira Kaneko*

カフカのように孤独に

「私は孤独です……フランツ・カフカのように。」これは、カフカ自身が年下の友人グスタフ・ヤノーホに語った言葉である。この言葉はそのまま、マルト・ロベールのカフカ論『カフカのように孤独に』（東宏治訳、平凡社ライブラリー）のタイトルにもなった。カフカは、彼自身がカフカである限り、どこまでも孤独であると感じていた。『変身』、『審判』、『城』など、カフカの主要作品にはいずれも孤独の影が差している。彼の孤独は、家父長的な父親との軋轢（あつれき）、また複数の恋人との婚約とその謎の解消にも関係している。その点で、信仰深い父親の下で精神的葛藤を経験し、またレギーネと婚約しながらも自ら破棄し、なおかつ生涯彼女を愛し続けたキルケゴールの姿とも重なるものがある。

キルケゴールは、『おそれとおののき』の中で、神の命ずるまま子イサクを燔祭に捧げようとしたアブラハムの解釈を行った。その背景には、彼自身が神への愛のためにレギーネとの婚約破棄に至った体験がある。彼がこの著作の中で訴えようしたのは、神の前にある信仰者は単独者でなければならないこと、そして単独者とは倫理的な意味では決して普遍化できない例外者だということである。例外者に与えられる試練には、時に人間として痛ましいものがある。カフカは『おそれとおののき』を読み、自らも深く共鳴するところがあった。もちろん 20 世紀前半の不条理のユダヤ人作家と 19 世紀後半のキリスト教実存思想家とは、その思想及びその背景が大きく異なり、両者を比較検討しようと思えば、1 冊の本を書かなければならなくなるだろう。ここでは、彼らの友人関係に光を当てながら、孤独という一点についてささやかな比較を試みたい。

交際と孤独とは相反するものではない。人間関係を保ちながらも、人は孤独を愛し、孤独を楽しむことができる。カフカもキルケゴールも、友人たちと食事をしたり談話に興じたりしたが、一人でいる時には霊感に満たされ、独創的な執筆活動に勤しむことができた。その意味で、両者はともに“ひとり上手”であった。さらに言うなら、自らの孤独を分かち合える友人がいれば、孤独であっても、決して“ひとりぼっち”ではない。だが、その点では両者は違っていたのである。

カフカの場合

カフカの友人と言えば、彼と無二の親友で、その死後にその著作を刊行し、詳細な伝記も書いたマックス・ブロートの名前が第一に挙げられよう。カフカにはまた、自らの孤独を語ることのできた年下の友人がいた。この若き聞き手こそ、グスタフ・ヤノーホである。彼は実科学校の生徒だった 17 歳の時、プラハの労働者傷害保険局に勤めていた父親の紹介で、彼の同僚のカフカと初めて面会した。ヤノーホはこの 20 歳年上の友人と折あるごとに対話をして、それを克明に記録した。それらの対話一つ一つが、生身のカフカを伝える貴重なドキュメントであり、我々は現在これを『カフカとの対話』（吉田仙太郎訳、筑摩書房）として読むことができる。「カフカのように孤独に」という言葉も、この書物の中に、カフカの科白として出てくるものだ。カフカは孤独だったかもしれないが、自分が孤独だと語れる相手を持つ以上、決してひとりぼっちではなかった。

ヤノーホはどちらかと言えば、一方的にカフカとの交際を求めていた。しかし、カフカのほうも積極的に応じて、自らも楽しんでいた節がある。彼はヤノーホの詩を読んで批評し、時にその悩みの相談に耳を傾け、適切な助言もしている。またプラハの街を二人で散策しながら、文学、宗教、思想、政治などの話題を交わしている。『カフカとの対話』では、カフカの姿が他を圧する主旋律としてあるが、それと同時にヤノーホの父親のことも控えめな副旋律のように奏でられている。だが、その結末（コーダ）は悲劇的だった。ヤノーホの両親は離婚訴訟に至り、カフカは結核のために退職して、彼の前から姿を消す。そしてヤノーホが 21 歳になった 1924 年、彼の父親は自ら命を絶ち、カフカも 41 歳を待たずして逝ってしまったのだ。

キルケゴールの場合

一方、キルケゴールはどうか。彼にはエミール・ベーゼンという牧師の友人がいた。彼とは臨終の床でも対話しており、それは断片的であるが、死を目前にしたキルケゴールの姿を伝える貴重な証言となった。しかし何と言っても、キルケゴールが自らの思想を語りたかったのはレギーネであった。だが、自分のほうから婚約を破棄し、後に他人の妻になった女性にそのようなことはできるはずがない。彼は結局、万感の思いを込めつつ、「かの単独者」に向けてその宗教的著作を著した（そういうこともあって宗教的著作はいずれも実名で執筆した）。

キルケゴールは若い頃、一時期コペンハーゲンの文学サロンに所属し、アンデルセンとも親交があった。ただ、彼はアンデルセンに対して辛辣な批評をするばかりで、両者の間には共感的な交流は生まれなかった。彼はまた、甥や姪から慕われたことが伝記から読み取れる。しかし、彼らはキルケゴールの深い思想的対話に入るには幼すぎた。結局、現実生活の中では、自らの思想を分かち合う生身の人間は誰もいなかった。その意味で、キルケゴールは孤独であり、なおかつひとりぼっちであったのだ。

なお、キルケゴールはひそかに童話を愛していて、自らも創作したいと思っていたようである。実際、彼は宗教的作品の中で、アンデルセンを思わせるような童話的文体を駆使している。芥川賞作家の室井光広は、『反復』（ゲンテーエルセ）とアンデルセンの名前とをもじって、そのようなキルケゴールの姿を童話作家「ゲンテルセン」と命名した（『アンデルセンとキルケゴール』講談社）。ゲンテルセンの「セン」はデンマーク語で「遅い、遅れる」という意味でもあるから、ゲンテルセンとは「遅れん坊」、そこから転じて弟分ということにもなる。けれども、アンデルセンにとって 8 歳年下のキルケゴールは決して弟分ではなかったし、キルケゴールにも弟分はいなかった。

もしキルケゴールにとって、カフカにおけるヤノーホ、あるいはゲーテにおけるエッカーマンや芭蕉における曾良のように、一歩遅れてついてきつつ、孤独を分かち合える弟分がいれば、キルケゴールの知られざる姿が後世に伝わっていたかもしれない。だが、残念なことに、そのような弟分は、彼にとっては見果てぬ「幻弟生（ゲンテルセン）」であった。

天理教とイスラームの出会い④―天理教学と宗教学のあいだ

おやさと研究所講師
澤井　真　*Makoto Sawai*

天理教学研究と宗教学研究

諸井慶徳（1914年3月30日～1961年6月25日）は、46歳の若さで生涯を閉じるまでに多くの著作を残した。天理教学研究に関する代表的な論稿は、『諸井慶徳著作集』（全6巻）のなかに収められている。それに対して、宗教学研究については、『宗教神秘主義研究序説』(1952年)、「宗教的主体性の論理」(『日本文化』1991年に書籍化)、そして『宗教神秘主義発生の研究』(1966年）などがある。

一見したところ、彼の神秘主義に関する研究は、それ自体で完結していたように見える。しかしながら、そうではない。天理教学における問題関心は、宗教学研究へと展開され、さらに伝道論や宗教教育に関する研究成果は、天理教学研究への情熱となって諸井を突き動かしていた。この点について、高野友治は、日本文化研究所や宗教学科で同僚であった諸井への追悼文のなかで、以下のように述べている。

> 諸井先生は宗教学を専攻されたというけれども、それは宗教学のための宗教学研究でもあつたであろうが、天理教学研究のための宗教学研究であつたのではないかと思う。又、私はそうであることを欲していた。(1)

戦前の宗教学研究において、諸井は稀有なイスラーム神秘主義の研究者であった。そして、イスラーム神秘主義研究において彼が抱いた問題関心は、天理教学研究における彼の問題関心と通底していたのである。その問題関心は、神という存在の探究ばかりではなく、神を希求し信仰生活を営む人間という存在それ自体への探究であった。この意味で、諸井慶徳の思想は、天理教学的にも宗教学的にも人間学的探究であった。また、マックス・シェーラーの哲学が諸井に決定的な思想的影響を与えたであろうことも、付記しておきたい。

天理教を信仰し、イスラームに関心を寄せる者として、諸井のイスラーム神秘主義研究における着眼点や独創性を部分的にではあるが紹介したい。

イスラーム神秘主義研究の道程

「回教神秘主義―特にその信仰の実相に就て」(1941年）と題した論文を発表して以降、諸井は、「ムハマッドに於ける神秘体験の問題―原始イスラームのタッサウッフ萌芽として―」(『宗教研究』130号、1952年）や、「宗教神秘主義に於ける行道の種々相」(『天理大学宗教文化研究所報』19号、1953年）を発表している。さらに、日本宗教学会において、彼は「イスラム神秘主義の発生に就て」(1960年）と題した研究発表を行っている。

1958年、日本で第9回国際宗教学宗教史会議が開催された。会議は日本各地をめぐるかたちで開催され、宗教施設見学先の一つに「天理ツアー」があった。この会議では、中山正善2代真柱や諸井も研究発表を行った。(2) 20世紀のイスラーム神秘主義研究を牽引した研究者の一人であるルイ・マシニョン（L. Massignon, 1883～1962）もまた、同じ会議に出席していた。マシニョンは、イスラームの有名な神秘主義者（スーフィー）であるハッラージュ（Abū al-Mughīth al-Ḥusayn al-Ḥallāj, 922年没）の研究で知られている。ハッラージュは、「我は神である」(Anā al-Ḥaqq）という言葉を口にしたことで、異端者とみなされて処刑された人物である。『宗教神秘主義発生の研究』では、マシニョンの著作が何度も引用されているが、イスラーム研究においてもっとも影響を受けた研究者の一人であると思われる。

『宗教神秘主義発生の研究』

研究とは、研究分野や文理を問わず、地道な検証の積み重ねである。そのことは昔も現在(いま)も変わりがない。諸井の『宗教神秘主義発生の研究』は、1953年11月9日に東京大学に提出された博士論文である。天理教山名大教会長や宗教文化研究所長などの要職を担いながら書き上げた、それまでの研究の集大成であった。そして、彼が博士号を授与されたのは1961年6月21日、彼の「出直し」の4日前のことであった。

序文のなかで、諸井の兄弟子であった大畠清は、諸井の学位論文の内容を次のように端的に説明している。

> かかる神秘主義が発生するに当つては何よりも体験が根本であるとなす通説を反駁して、体験以前に既に或種の生の納得としての基盤があることを数多くの直接体験的資料それ自体を仔細に分析する中から明らかに指摘した。このことは凡そ宗教的体験理解に対して注目すべき事柄であろう。当事者その人にとつては直接的には体験こそ最も基本的なものであると自覚せられるのである。然し実はその体験的自覚をして成立せしめるべきより基底的なものがあることを著者が露呈せしめたのである。(3)

私たちの多くは、直接的な体験こそが、私たちの人生を決定づけると考えるかもしれない。この意味で、体験こそが最も重要なものだとみなしてしまう。しかしながら、諸井によればそうではない。むしろ、私たちには「体験以前に既に或種の生の納得」がある。誤解を恐れずに言えば、「生かされて生きている」という日々の生の自覚であろう。この自覚を基にした直接的な体験こそが、諸井の理解する「神秘主義」である。

この理解は、諸井のイスラーム神秘主義に対する眼差しにも現れている。イスラーム思想史において、神秘主義は、苦行主義（禁欲主義）を基盤に登場したというのが一般的通史である。しかしながら、諸井はこの平板な理解を退けた。彼は、預言者ムハンマドが神からの啓示のなかに、神秘主義の萌芽を見出した。「我は神である」というハッラージュの言葉は、預言者ムハンマドの口を通して、神秘家たちが語った啓示の追体験であった。

筆者自身、諸井が考究してきたイスラーム神秘主義を研究対象としているため、彼が考察したアラビア語文献や欧米文献を同様に読んできた。それゆえであろうか、諸井の筆致のなかに信仰と学問の息遣いを感じる機会が多い。天理教とイスラームのあいだに立ち、信仰は違えども、神を信じ教祖を慕う信仰者として、彼はイスラームの神秘主義者たちの信仰を真正面から受け止めた。信仰と研究の軸がぶれない諸井の研究態度に、彼自身の信仰的情熱と教祖への憧憬が感じ取れるのである。

［註］
（1）高野友治「教学の恩人―諸井先生」、天理教山名大教会編『追悼』、正道社、88頁。
（2）諸井の発表題目は、「宗教的絶対体験の類型」(Types of Religious Absolute Experience）であった。
（3）大畠清「序文」諸井慶徳『宗教神秘主義発生の研究』、天理大学出版部、1966年、2頁。

仏典翻訳の歴史とその変遷 ⑧

天理教海外部翻訳課
天理大学非常勤講師
成田　道広　*Michihiro Narita*

道安の翻訳観

インドと中国という異質の思想交渉である漢訳は、二言語間の相違や表音文字から表意文字への変換という言語的制約、さらに様々な経典がランダムに将来されるという特殊な状況が、多くの混乱を生み出す要因となっていた。そのような状況で道安は漢訳に際して留意すべき点を整理し、経序において持論を提示した。中でも「摩訶鉢羅若波羅蜜経抄序」『出三蔵記集巻八』に記された「五失本三不易」から彼の翻訳観が理解できる。

五失本とは、翻訳上、原義を失うことが不可避であると判断される五つの項目を意味する。

> 第一には翻訳すれば語の配列順序に於て、胡文と訳文とが互に逆になること。第二は胡経は質朴を旨とするが、秦人は文を好むから、訳すれば本の質を失う。第三には胡経には反覆が多いが、翻訳の際には裁斥される。第四には胡経には同じ内容を重ねて別な語によって表現したため一見混乱と思われるような場合があるけれども、それが大量に削除される。第五には胡経は段落の改まる毎に既述の事項を繰り返すが、翻訳の時には悉く此が除かれる。（横超，1983:8）

道安はこれらの五項目について、漢訳に際して必然的に原文の形式を失うものであると示している。これらに限っては、本意ではないが漢人のためには容認するというのが彼の主張である。

インド諸語から漢訳する場合、語順はどうしても変化してしまう。これは言語的な相違から致し方ない点である。次に、原文は質朴であるが、漢人は文雅を好む傾向があり、訳文に文飾が多用されるとその質朴さが失われてしまう。漢人が文雅を重要視するがゆえに、原文の質朴さは、経典の価値を貶めてしまうという危惧が背景にあると思われる。さらに、原文では、釈迦や菩薩への讃嘆のために同じ表現が何度も繰り返されているが、反復を嫌う漢人の趣向を考慮し、意味的に問題がない部分は省略される。インド諸語の宗教文献の特徴として、反復の多用がみられる。これは口述を基本とする教理伝達の伝統と、語音や声そのものに依拠した神秘的霊力の再現性とその信仰が影響していると思われるが、反復の多用は漢人には好まれず、恣意的に削除されたようだ。このような傾向は第四、第五の項目にも共通している。

次に道安は「三不易」についても指摘している。これに関して、「三不易」と読み、容易ではない三点という解釈と、「三不易」と読み、改易してはいけない三点という解釈があり、研究者によって判断が分かれているが、ここでは横超慧日の論述をもとに「三不易」として道安の翻訳観に注目したい。

> 第一は、般若経は仏が説かれたもので、聖者は必ず時を顧慮して説かれているから、時代につれて習俗が変ったからといって古の雅古に立って説かれたものを今風に変えるということは相成らぬ。第二には聖人と凡人とはとうてい及び得ぬ隔りを持つものであるから、上古の微妙な教を末世の今に合わせるというような勝手なことは許されぬ。第三には釈尊を隔つこと間もない仏弟子の阿難や迦葉でさえも結集に際して少しの過もないようにと兢兢として謹慎の中に事に当った。然るに仏を去ること千年の今、生死人の凡愚である人どもが平然として経典に取捨を加えるとしたならば、無法無礼言語道断だという。（横超，1983:9-10）

この解釈に基づくと、道安の翻訳観は、原文への敬虔なる忠実さと求道心を重要視し、「三不易」として意訳的態度を厳しく批判しつつも、上述の「五失本」ではある程度の変容を容認していたように見受けられる。

道安以前には、漢訳の文体に関して漢語の品格や読みやすさを重要視し、文飾を多用して反復を削除する「文」派と、質朴で実直な逐語訳的直訳を心掛ける「質」派の間でさかんに論争が行われていた（横超，1958:219-236）。そのような議論によって翻訳そのものに関する論理が醸成されていった。

質派は、原典の本意を忠実かつ正確に伝える事に専念するので、文飾などは一切不要で、質実な文体を用いた翻訳といえる。この場合、原文に忠実であるがために音写語を多用しすぎて文意が全く通じないことや、直訳により原文の意味が通らない箇所は訳出されず、そのまま抜け落ちてしまうこともあったようだ。当時の漢人にとって質派の訳文は原文重視が故に難解かつ読みにくい訳文であったと思われる。

これに対し文派は、雅文を多用し、ある程度の文飾を用いて格調ある達意的な文体を心掛け、意訳を容認する姿勢をとる。中国では特に雅文を好む性格上、後者の文派の翻訳が広く用いられるようになった。この文派の洗練された訳文により、漢人の好みに適した仏典が社会に広く認められるようになり、文意も通じるようになったが、教学的見地からは原文に対する忠実さが欠けた翻訳であり、教理の変容につながった。

このような翻訳観の対立は、インド諸語の原文の語彙を意訳するのか、音写して音訳するのかという判断基準にも関係していたと考えられる。例えば、Buddha を「覚者」と訳すのが意訳であり、「佛陀」とするのが音訳である。表意文字を有する漢語の場合、「覚者」の訳語からその語意が容易に理解できる。しかし、音写語の「佛陀」の場合、原語の音には近いが、その意味概念の伝達は至難であり、感覚的かつ情緒的な理解にとどまるため、解釈の補完が必要となる。当然ながら文質彬彬、つまり原文に忠実で、なおかつその意味が明確に伝達できる翻訳が理想であるが、実際の翻訳場面においてその両立は困難を極める。あくまでも原文への忠実さを踏襲し、多少読みにくくても直訳を施すのか、原文からは多少遠ざかったとしても全体的に文意が通る意訳を施すのか、文質論争においては実際的翻訳論が二極化していたことがわかる。

そのような状況を前に、道安は愚直な直訳を斥け、文派を容認する翻訳観として「五失本」を提示し、また同時に極端な意訳を戒め、原文に忠実な質派の姿勢を支持する翻訳観として「三不易」を記し、その両立を模索する翻訳観を提示したと考えられる。この希望的翻訳観は、それが実現不可能な場面に多く直面する翻訳者にとっては机上論になりかねないが、それによって目指すべき翻訳の境地を明確に意識することも可能となる。

道安は漢訳仏典に精通し、経録をまとめ多くの経序を残した。彼は漢訳の指導的役割を担ったが、実際に翻訳には従事していなかった。翻訳者ではなかったがゆえに、翻訳者が翻訳に没頭するあまり陥ってしまう陥穽を見抜いていたのかもしれない。

［引用文献］
横超慧日『中国佛教の研究　第一』法蔵館、1958 年。
横超慧日「仏教経典の漢訳に関する諸問題」『東洋学術研究』22 巻 2 号通号 105 号、1983 年、pp.1-12

弥生人は龍を見たか？

天理大学文学部教授
桑原　久男　*Hisao Kuwabara*

弥生時代中期後半（紀元前１世紀頃）の唐古・鍵遺跡と清水風遺跡では、人物や鹿、建物など、具象的な図像を表した「絵画土器」が発達した。それらの図像は、ほとんどの場合、現在の我々が見ても何を表したかがわかり、弥生人の生活世界を想像することができる。これに対して、弥生時代の後期になると、唐古・鍵遺跡をはじめ、奈良盆地の諸遺跡では、「絵画」に代わり、壺などの土器の器面に、直線（縦線・横線・斜線・V 字形・三叉文）、曲線（U 字形・ノ字形・J 字形・円形）、点などで構成される抽象的な記号が表されるようになった。「もし、日本に文字が伝わらなかったら、弥生時代の記号が文字として成立したかもしれない」と考えたのは、考古学者の森浩一氏だった。唐古・鍵遺跡を調査する藤田三郎氏も、現代の地図記号や絵文字と同じように、それらの記号が何らかのメッセージを伝達する媒体として機能したと見る。しかし、その意味するところは残念ながら解読不能と言わざるを得ない。

ところが弥生時代後期の土器には、そうした記号に混ざって、特定のモチーフを具象的に表した「絵画」が限定的に存在する。天理参考館が所蔵する人物図像を表した土器片（唐古・鍵遺跡）がその貴重な一例だが、このほか、西日本の各地で、「龍」とされる図像を表した土器が点々と発見されているのだ。1966 年、森浩一氏が、大阪府船橋遺跡で採集された長頸壺の「奇怪な動物の線刻画」について龍をモチーフにしたと認定し、さらに 1970 年、大阪府池上曽根遺跡で井戸から出土した新資料を、佐原真・金関恕両氏が「龍」と追認した。こうして、一連の「鰭（ひれ）をもち、身をくねらせる S 字状図像」を「龍」と見る理解が広まり、そのモデルになったのは、中国から伝わった銅鏡に表された龍の図像だったと考えられるようになる。

写真　池上曽根遺跡の「龍」（大阪府立弥生文化博物館）

一方、春成秀爾氏は、「後漢代の銅鏡の鏡の図像を原画として、弥生土器の龍が生まれたとする説の根拠は、後漢代と弥生時代は同時代であること、両者とも体をくねらせて四肢と尾をもつ想像上の動物であることの２点だけ」で、「相当の無理を重ねた一つの仮説にすぎない」と指摘する。春成氏によると、中国鏡の龍の図像は、頭・胴・尾、前肢、後肢のどの要素をとっても陸棲の肉食獣を表すのに対して、弥生土器の龍は、くねらせた胴・尾と、三角形の鰭状の突起が特徴的で、水棲の獣あるいは魚として描かれている。だから、弥生土器の S 字状図像を龍として見る場合には、鰭の位置、大きさ、長さと向きによって、下顎、２本の角、２つの耳と１つの鬣（たてがみ）、２本の前肢、２本の後肢などを判別しなければならない。

果たして、弥生土器の「鰭付き S 字状図像」は、本当に龍を表したものなのだろうか。竜蛇という表現がある。蛇は自然界に存在するが、竜（龍）はあくまでも空想上、超自然の存在だ。天理参考館が所蔵する殷代の甲骨文字を見ると、竜の字形は、胴部と尾を単線で表すが、手足はなく、頭に２本の角を持つ。有角の蛇は、すでに超自然の存在だ。中国の竜は、その後、独自に発達を遂げ、さまざまな生き物の部分部分がハイブリッドに組み合わさって究極化した姿が「龍」だと言える。後漢の王符による九似説によれば、角は鹿、耳は牛、頭は駝（駱駝）、目は兎、鱗は鯉、爪は鷹、掌は虎、腹は蜃（しん）（蛟）、項（うなじ）は蛇なのだ。龍は、『史記』の劉邦出生伝説をはじめ、中国では皇帝の象徴として扱われた。

これに対して、倭人社会の伝承を伝える『記紀』や『風土記』には、土地や水の精霊としての竜蛇の類を描いた神話や説話が認められる。記紀では、三輪山の神は、櫛笥（くしげ）に隠れる小さな蛇として描かれ（箸墓伝承）、雷鳴を轟かせ、稲光を走らせる大蛇としても描かれる（雄略記）。ヤマトタケルを苦しめた伊吹山の神も大蛇だった。記紀や風土記には、有足の蛇（仁徳記のミズチ）、有角の蛇（常陸国風土記のヤツノカミ）も登場する。ヤツノカミ（夜刀神）は、谷の池に棲み、胴体が蛇で、頭に角がつく。群れをなして現れ、見る人の家門を滅ぼし、子孫を絶やしてしまうと言われ、開墾作業を妨害したため、マタチ（麻多智）によって成敗された。

また、最近、奈良時代の疫病対策として話題になった二条大路木簡の呪符では、南山の下の流れない水の中に、九頭一尾の大蛇があり、あまり物を食べないが、「唐鬼」（天然痘）を食すと記される。その霊力に期待して、「朝に三千食え、暮に八百食え。急々如律令」とまじないを行った。記紀に見えるヤマタノオロチ（八岐大蛇・八俣遠呂智）は、八頭八尾の大蛇で、人身御供を要求した。このように、記紀や風土記等に見える竜蛇の類いは、オロチや大蛇と表記され、四肢を備えた「龍」ではない。つまり、古代中国の龍は、さまざまな生き物の要素が接合した「ハイブリッド」型だが、倭人社会の「竜蛇」の姿態は、有角あるいは有足以上のハイブリッド化が進まず、ヤマタノオロチにしても、二条大路木簡の九頭一尾の大蛇にしても、頭や尾など、身体の一部を同じ形でクローンのように過剰化させた特徴をもつ。このような異形の竜蛇（オロチ）は、強い霊力をもち、人々から怖れられる存在だった。

このように考えると、弥生土器の「鰭付き S 字状図像」は、胴部に付加される多数の鰭を過剰化した身体部分の表現と見ることもでき、中国のハイブリッド型の龍というよりは、倭人社会に根ざしたクローン増殖型の竜蛇（オロチ）の姿を表しているのかもしれない。池上曽根の竜蛇（オロチ）の右側には、木の枝を逆さにしたような図像が見られ、春成氏は雨を呼ぶ稲妻の表現と考える。また、弥生土器の竜蛇（オロチ）の多くは、長頸壺（水壺）に描かれ、井戸から出土する事例が目立つ。齋藤純氏によれば、雨や水害に関連する大蛇伝承は日本列島の各地に見られるが、弥生時代の竜蛇もやはり雨や水と深く結びついていたようだ。

ヨンビ＝オパンゴ４代大統領の軌跡 ②

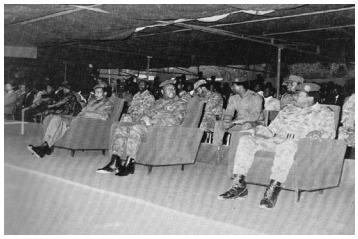
国際学部教授
おやさと研究所兼任研究員
森　洋明　*Yomei Mori*

前号に引き続いて、今年３月30日、新型コロナウィルスで亡くなったコンゴ４代大統領ヨンビ＝オパンゴ（Jacques Joachim Yhombi-Opango）の軌跡をたどっていきたい。政治家として、独立以来さまざまな時局に関わってきた彼の生涯を通じて、コンゴがたどってきた歴史を見ることができる。

「コンゴ労働党軍事委員会（Comité militaire du Parti Congolais du Travail）」の長になったヨンビ＝オパンゴは、1977年４月、大統領に就任するのだが、その２年後には同委員会や党からも糾弾され、政権の座からおりることになる。

オパンゴの政権はそもそも当初から不安定な材料が多かった。まず、前政権下で急速に進めていった社会主義路線によって、国の経済が悪化の一途をたどっていた時期と重なっていた。就任直後から、彼がフランスやアメリカなどに歩みを寄せたのにはそうした背景があっただろうし、同時にそれによって党内で反感を買ったとも言えるだろう。汚職も多かったようだ。また、前大統領の暗殺事件以降、国を二分する南北の対立がより表面化し、社会的に不安定な状況にあった。そして、彼の大統領の立場自体が憲法で裏付けられていたわけではなかったことも、短命な政権の要因ではなかっただろうか。

独立以来コンゴでは、それまで憲法が３回変わってきた。最初の憲法の制定は1963年のことで、ユールー初代大統領の政権下であった。その第一条では、「独立国家」「国の不可分」「政教分離」「民主主義」「法の下での平等」「信教の自由」「男女同権」などが明記され、国のスローガンとして「統一、労働、発展」が謳われていた。次いで、マサンバ・デバ大統領が失脚した翌年の1969年、マリアングアビ大統領の下、共産化に舵を切ったことにより新たな憲法が制定され、そこでは国名を「コンゴ人民共和国」と変更、また国歌や国旗の変更、コンゴ労働党（PCT:Parti congolais du travail）の単一政党制が明記されている。さらに、1973年には同じくングアビ大統領の下で改正され、３番目の憲法となり、社会主義化路線の継承とともに、大統領の権限や国会、国務院などの役割が明記されている。


コンゴ労働党軍事委員会

1977年、オパンゴが大統領に就任したときの憲法はこの３番目の憲法であるが、彼の就任自体は大統領暗殺という特殊な状況のなかで行われたものであり、彼の「立場」を保障する条文は存在していなかった。就任直後に制定された党軍事委員会の基本方針には、憲法の一時停止、また国を統括するのは軍事委員会と明記され、その長（Président）がコンゴ労働党の党首となり、同時に国の代表となると決められていた。こうした背景もあり、この暫定的とも言えるコンゴ労働党軍事委員会の決定によって、1979年２月、わずか２年弱の年限を経て、大統領を辞するのであった。その後を継いだのが同委員会のナンバー２で、同じボシ族で、同郷でもあるサスンゲソであった。

大統領を辞職した彼は、ブラザヴィルにおいて政府の監視下におかれる。彼の財産は没収され、居住していた家は党の施設として使用されるようになった。その住居はかなり豪華な造りだったようである。また、彼が失脚時に保有していた物品が公表された。「布製のトランク28個、宝石箱７個、ブランドのスーツ40着に靴60足」などとリストアップされた。そして、これらすべては国によって没収された。

５年後の1984年、ようやく生まれ故郷のオワンド（Owando）に戻れるようになる。そこでどのような活動をしていたのかは定かではないが、87年７月には、政府転覆を扇動したという容疑で再度拘留されることになる。当時サスンゲソ大統領による一党独裁体制が続いていた。したがって、独立以来続く民族の違いに依拠する南北の対立といったものだけでなく、出自とは関係なく、独裁体制との「距離」に拠る対立もあったのではないだろうか。しかし、それから３年後、90年代になると国は急速に複数政党制、選挙といった民主化へ路線を切り替えることになる。それはまた、南北の対立を再燃させるのだった。

東西冷戦が終了したことによって、とくにソ連の崩壊によって、共産化したアフリカの諸国がその後ろ盾を失ってしまった。そこで西側諸国に援助を求めるようになるのだが、援助と引き換えに民主化の要求を突きつけられたのである。コンゴも他国と同様に、暗殺されたングアビが創設したコンゴ労働党という一党体制から複数政党制へと移行することになる。そしてこの動きのなかで、拘留されていたオパンゴは釈放された。

政界にすぐに復帰した彼は、自らの政党を結成する。また、大統領失脚時に没収された財産を取り戻す裁判を起こし、勝訴した彼は10億CFAとも言われている賠償金を勝ち取っている。

1992年、大統領選挙に立候補するがあえなく敗北する。この選挙で選出された南部出身のパスカル・リスバ（Pascal Lissouba）と同盟を結び、94年から96年まで首相を務めることになる。しかし、97年６月から10月にかけて、アンゴラの援助を受けたサスンゲソとリスバ大統領との間で武力衝突が起きてしまう。サスンゲソ側が勝利すると、大統領側についていたオパンゴは国内に留まることはできず国外に逃亡。ガボンやコートジボワールを経てフランスに亡命することになった。

2001年11月、国の経済に危機を招いたということで、被告人不在のままでオパンゴに対する裁判が行われ、20年間の強制労働の刑が決まった。国の石油の利益の横領がとくに糾弾された。そして６年後、国民選挙を経て大統領の座に正式に返り咲いたサスンゲソの恩赦によって、オパンゴの亡命生活に終止符が打たれたのである。2007年８月、オパンゴは再び祖国の土を踏むことができた。68歳になっていた。自身が作った政党は息子に任せ、政界から退き、コンゴとフランスを往来する余生を過ごしていたようである。

植民地時代から始まるヨンビ＝オパンゴの生涯は、独立や冷戦、部族間衝突、共産化、独裁制、民主化、複数政党制、内戦など多くのアフリカ諸国が経験した歴史と重なってくる。そこには旧宗主国との緊密さも見え隠れする。ちなみにコンゴの憲法は、その後の政変が重なるなかでさらに４回変わり、現在の憲法は2015年10月の国民投票によって承認されたものだ。この憲法改正によってサスンゲソ現大統領は３期目を迎えることができている。

20 世紀のライシテ ①

天理教リヨン布教所長
藤原　理人　*Masato Fujiwara*

2018 年 7 月号までライシテの歴史を追ってきたが、1901 年のアソシエーション法などを経て 1905 年の「教会と国家の分離法」に至る一連の流れは、その後の趨勢を決めたという意味で画期的であった。この時期のライシテの特徴を三つ挙げると、一つ目は、宗教が国家体制から分離した制度になったことである。「極端な場合には、宗教は、社会的にアソシエーションのように機能することもある」（ジャン・ボベロ，p.76）。アソシエーションとは、二人いれば設立できる、誰にでも作れる結社だ。当時のフランスには今でいう世界宗教しかなかったと言っても過言ではないだろうが、その宗教が誰にでも作れる小集団と同列に置かれうることになったのである。二つ目は教会に客観的必要性がなくなったこと。かつて教会は社会に存在すべきもので、それなしに市民生活は考えられなかった。しかし、聖職者の政治活動は禁止され、公教育や医療制度が、教会に代わり社会的必要性を満たすとされた。三つ目は宗教選択と無信仰の自由である。今後、市民は気兼ねなく宗教を選び、また拒否することもできる。こう考えると、私たち現代人の感覚に近くなってきているのが分かる。事実、1901 年と 1905 年の法律は現行法である。

しかし百年以上前の当時、これらが直ちに市民レベルで浸透しなかったことは容易に推察できる。自由に宗教を選べるといっても、周囲の目が気にもなっただろうし、長年培った家族の伝統や体裁もあっただろう。公教育の道徳観から一気に宗教性が消え去ったとも断言できないだろう。事実、1905 年以降もあらゆる面で論争がやまなかった。

そんな中、1914 年に第一次世界大戦がはじまり、「聖なる同盟 Union sacrée」のもとフランス国のために共闘するという感情が芽生えた。イヴ・ブルレーの言葉を借りれば「地獄のような塹壕の中では社会的、文化的、宗教的な壁に大した意味はなくなる」。前線には様々な背景を持つ兵士がいた。アブラハム・ブロックという大ラビが志願してヴォージュ地方の戦地に赴いた。激しい戦闘の中で倒れたある兵士が最期に十字架が欲しいと懇願したため、ラビがキリストの十字架像を見つけてきて彼に与えたところに、両人の頭上で爆弾が炸裂、ともに戦死した。そこにはその最期のいきさつを見届けたイエズス会兵士の姿があった。このように、宗教者たちはそれまで接することのなかった一般兵たちと時を共にし、兵士たちは反教権主義者が刷り込んだ否定的なイメージと異なる、武器をもって戦う宗教者たちの姿を目にして、宗教の違いやわだかまりを越え、生死や苦痛を共にする仲間たちの団結がみられたのである。

激しい戦闘が兵士たちの宗教心を呼び起こすこともあった。血の代償で守られる愛しい国は神聖視され、苦痛や贖罪、犠牲といった精神性がキリストや聖人を想起させることもあった。また戦地に赴かないものは、教会へ行って出征者の生還を祈り、あるいは戦死したもののために共に涙した。まさに挙国一致といったところだろうか。

国内のカトリック教会はともに戦う仲間であったが、ローマ教皇の中立的な立場はフランスでは好意的に受け取られなかった。クレマンソーは皮肉を込めてベネディクト 15 世を「ドイツ人の法王」と揶揄した。歴代フランス王が戴冠式を行ったランス司教座聖堂が爆撃で焼け落ち、フランス国民団結のシンボルとなっても、法王は公式の弾劾声明もなしに、ドイツ側に破壊行為を止めるよう呼びかけたにすぎず、フランス人の感情を逆なでした。そのため、1919 年の終戦の際、和平交渉においてバチカンは蚊帳の外に置かれた。

バチカンと共和国の冷え切った関係の修復に一役買うことになったのが、ジャンヌ・ダルクである。彼女はすでに 19 世紀以降、共和派からはカトリック教会に見放された悲運の救世主、そして愛国心の象徴として崇められ、右派や教会側からは清純なる殉教者とみなされるようになっていた。愛着を込めて Pucelle d'Orléans（ピュセル・ドルレアン、オルレアンの乙女）と呼ばれる彼女は、1909 年ピウス 10 世によって列福され、1920 年 5 月 16 日にベネディクト 15 世によって列聖された。その直後 1921 年には在バチカン仏大使の任命、同年在仏バチカン大使館設置承認と続いた。フランス・イタリア・バチカン三国の外交的理由もあって 1904 年以来ぎくしゃくしていた関係が、ここに復活した。もちろんジャンヌ・ダルクの存在だけが理由ではないだろうが、19 世紀から 20 世紀初頭にかけてフランス国内で、共和派と教会の両者の橋渡し役のようにジャンヌ・ダルクがクローズアップされたことは、当時の雰囲気を知るうえで興味深いと言えよう。一例として、19 世紀後半に建てられたリヨンのフルビエール・バジリカ聖堂内にある六面のモザイク画の一つは、リヨンとは無関係ながらジャンヌ・ダルクをテーマにしている（該当するモザイク画は 1917 年作）。

この大戦中に、一つの新たな問題が発生している。これまで存在感のなかったイスラムである。フランスのために戦ったムスリムのアフリカ兵戦死者をどのように弔うのか。戦中からすでに葬儀をムスリムの手で行うとか、記念碑を建てるといった構想が練られていたが、その流れからパリの大モスクが生まれた。イスパノ・モレスク様式のモスクは 33 メートルの高さのミナレットを備え、1926 年 7 月 15 日、共和国大統領臨席のもと盛大に落成式が行われた。いかなる宗教にも補助金を出さないという 1905 年法にも関わらず、公費が投入された。こうしてフランスのために命を投げ出した数万人（戦死者数はデータによって 7 万人から 10 万人と幅がある）のムスリムへの敬意が公然と示された。

［参考文献］

Yes Bruley, *La laïcité française*, Edition du Cerf, 2015, pp. 125-215.

Jean Baubérot, *Histoire de la laïcité en France*, PUF, 2010, pp.71-104.

ジャン・ボベロ『世界の中のライシテ』、白水社、2014 年、75 ～ 78 頁。

谷川稔『十字架と三色旗』、岩波現代文庫、2015 年、210 ～ 237 頁。

工藤庸子『宗教 VS 国家』、講談社現代新書、2007 年、174 ～ 189 頁。

伊達聖伸『ライシテ、道徳、宗教学』、勁草書房、2014 年、255 ～ 310 頁。

5. コロンビアの体質 3

天理教コロンビア出張所長
清水　直太郎　*Naotaro Shimizu*

4）アマゾン地域と先住民 1

アマゾンと言えばブラジルの“専売特許”と思われがちであるが、南米のほとんどの国にアマゾン地域が存在する。ペルーでは国土の 62%、エクアドルでは 51%、ボリビアは 43%、その他ベネズエラにも「アマゾン州」がある。コロンビアでは、国際政治上及び人類学的視点から見て、アマゾン地域は大変重要な地域という位置づけである。そうした点をも含み、今回ではアマゾン地域のみを解説したい。

まず、アマゾン地域は地域中で一番広い面積を占め（コロンビア全体の面積の約 40%）[1]、そのために複数の隣国と国境を接していることとなる。東部はベネズエラ、南西部はブラジル、南部はペルー、南東部はエクアドルである。

アマゾン地域には、アマゾナス県、カケタ県、グアイニア県、グアビアレ県、プトゥマヨ県、とバウペス県の 6 つの行政県がある。

＊自然・気候

「アマゾン」という言葉ですでに「熱帯」を想像してしまうし、その通りである。しかしながら、気温は 24 度～ 27 度の間でそれほど（昨今の日本と比べると）高くない。ただ、雨がよく降る地域であり、年平均 2,000 ～ 3,000mm の降水量がある[2]。ちなみに日本は平均して約 1,800mm である。

＊歴史：領土戦争

なぜアマゾン地域が国際政治に関係するかと言えば、アマゾン地域は前述したように南米 4 カ国との国境と接しているので、領土の問題が常に存在しているからである。その中でも、独立時期の 19 世紀はじめから近年まで続いていたのがペルーとの国境問題であった。

1933 年に「コロンビア・ペルー戦争」が勃発している。約 1 年間ほど戦いが続き、結局以前の 1922 年にサロモン＝ロサーノ協定（ペルーとコロンビアの両全権大使の名前）が、1934 年にリオデジャネイロで再批准され、その戦争は一応決着となった[3]。

＊人口

人口の一番少ない地域では、6 つの県を合わせても約 27 万人[4]の総人口しかいない。例えばアマゾナス県の人口密度は 0.62 人、バウペス県は 0.71 人というように、アマゾン地域全体でも 2.49 人[5]で、非常に過疎の地域である。人種的には白人とメスティソが 55%、先住民が 42%を占めている。ちなみに黒人系は 3%。先住民の割合が多いこの地域で、資料によって差があるものの、人口比は別にしても、先住民の種族が全地域に数多く暮らしているのは事実である。

コロンビア全体で約 100 種族の先住民が存在するのだが、アマゾン地域だけで約 60 種族が暮らしている。その先住民共同体（先住民の村）を「保護地区」と呼ぶ。現在はアマゾン地域には 162 の地区がある[6]。

5）先住民 (población indígena)[7]

さて、先住民のテーマが出たので少し寄り道をさせてもらい、今回及び次回でコロンビアの先住民の概略を述べたいと思う。ラテンアメリカ全地域において、コロンビアの先住民は、全人口に対する割合は 3.4%（現在は 4.4%）と少ないが、人口数で言えば、ペルーに次いで 2 番目の地位をチリと分け合っており（表参照：2019 年の資料では 1.9 百万人）、アフリカ系住民と同様に、人類学的にコロンビアを知る意味でも大切だからである。思うにコロンビアの国民性形成において、先住民の存在と役割は外せないのである。

＊保護地区での生活

2006 年の資料ではコロンビアには全体で 710 の保護地区があり、それぞれ村落を形成している。その範囲はコロンビア全国に及び、32 県の 27 県に存在し、独自の支配構造 (Cabildo) を組織している。その広さを合わせるとおよそ 34,000,000ha. になり、国の面積の 30%を占めるという[8]。彼らはそこで独自の生活を行っている。部族には言語、宗教、食文化、生活様式がある。彼らの生活の基本は「狩猟生活」と「採集生活」である。遊牧民の性格を持った部族も存在するが、それも密林の中で移動するだけで、遠くには移動しない。多くは一定の地域範囲でくらしていて、野菜や穀物などを栽培している。代表的なものはキャッサバ（タロイモ）、トウモロコシ、豆類、バナナ類など中南米原産の農作物が主であり、栽培しやすい植物が主である。

＊先住民の価値観

すでに学術的には周知であるとはいえ、先住民の価値観、すなわち彼らの「信念、信条」というものが、ラテンアメリカをラテンアメリカたらしめ、さらにはコロンビアをコロンビアたらしめていると、私は以前から考えている。よく「ラテンアメリカはヨーロッパか？」ということがテーマになるが、先住民の存在、またスペイン人と先住民の混血（メスティソ）の世界はやはり白人社会と異なるのである。その一部を垣間見た時があった。（次号へ続く）

全アメリカ大陸の先住民人口
https://es.statista.com/grafico/19589/poblacion-indigena-en-paises-americanos/ より

［参照 URL］
(1) https://www.lifeder.com/region-amazonica-colombia/
(2) https://es.climate-data.org/america-del-sur/colombia/amazonas-2364/
(3) https://www.lifeder.com/region-amazonica-colombia/
(4) Ibid.
(5) https://sinchi.org.co/files/Base%20de%20Datos%20Inirida/PDF/01_Densidad%20de%20poblacion.pdf
(6) https://opiac.org.co/organizaciones/ (Organización Nacional de los Pueblos Indígenas de la Amazonía Colonbiana)
(7) https://gestion.pe/mundo/los-paises-con-la-mayor-cantidad-de-poblacion-indigena-de-america-noticia/?ref=gesr (Gestión Mundo)
(8) https://caracol.com.co/radio/2006/10/31/economia/1162312680_351359.html (Caracol Radio)

ヴァチカン便り（46）

聖ソフィア教会の今―財産と信仰をめぐる話

大ローマ布教所長
山口　英雄　*Hideo Yamaguchi*

聖ソフィア教会の歴史と現在

キリスト教は313年、ローマ帝国のコンスタンティヌス1世によって公認されたが、皇帝は都をローマからコンスタンティノポリス（現イスタンブール）に移した。当然キリスト教の諸活動もそこが中心となった。その中心の教会が、聖ソフィア教会である。その教会は537年に東ローマ帝国のユスティニアヌス1世によって築かれた。彼は世界で一番美しい教会であることを望み、教会の智恵（ソフィア）の中心、また東方の光として建造されたので、その美しさは類稀である。教会内のモザイク画の美しさ、調度品の豊富さ、それらは聖心を飾る物であり魅惑的な物である。コンスタンティノポリスはキリスト教の特別の町とされ、新しいローマと呼ばれた。その後、東方正教会（ギリシャ正教会）中心としてギリシャの影響を受けたビザンティン文化が栄えたが、その住民は「ロミオイ」、「ロマーニ」と呼ばれていた。（今でもトルコ人はギリシャ正教の人たちを“ルーム”と呼んでいる）。

その後、第4回十字軍の遠征により、1204年の十字軍の下に東ローマ帝国は敗れ、聖ソフィア教会はカソリックの教会となった。1204年から1261年まで、カソリックの教会として、ローマ風の儀式が行われていた。しかし1453年、コンスタンティノポリスを占領したオスマン帝国のメヘヒット2世は聖ソフィア教会ですぐに、イスラムの礼拝施行を指示し、教会をモスクに変更し、これを町の中心とした。モスクの屋根はローマのパンテオンを模し、周囲を支配する中心的建築物とした。時は流れて1935年2月1日、トルコ共和国のムスターフ・ケスール・アタトゥルク初代大統領の望みによって、聖ソフィア教会は博物館となった。この博物館は、世界で最も訪問客、見学者の多い所であった。ところが、2020年6月、エルドアン現大統領は、聖ソフィア教会をイスラム教のモスクにすると公表。7月24日からモスクとして、再出発すると発表したのだ。

7月12日のアンジェルスのお話の際、フランチェスコ法王は、聖ソフィア教会がモスクになることを嘆き、その心の痛みを訴えた。それに対して、トルコは、教会の中のモザイク画、フレスコ画には手をつけないことを表明した。イスタンブールのバルトメオ主教はイスタンブールを、特にソフィア教会を中心にして「会合の中心地」「対話の中心地」「キリスト教とイスラムの相互理解の地」と訴えていた。

隣人をしっかり見つめ、愛せ

フランチェスコ法王は『聖書』を引用して『イエスの眼差しをもって』という本を刊行した。この書物では、共観福音書に基づき、一人の裕福な若者とイエスの言葉のやりとりを記している。法王は、「マルコ伝」10章21節を引用しながら話を進めている。それは次の通りである。この若者がイエスに言う。「主よ、この財産は私の若い時から、全て見守ってきた物です。」するとイエスは、彼を見つめ、彼に言った。「お前には一つのことが欠けている。行きなさい。そして持っているものを売り尽くし、それを貧しい人に施しなさい。そして、おまえは天国で宝物を得るだろう。来なさい。私に付いて来なさい。」この言葉で彼の顔は青ざめてしまい淋しくなりなり、何処かへ消えていった。

確かに彼には豊富な財産があった。この若者は永遠の生命を得るために、何をしたらいいのか問うている。この短いやり取りの続きを記しているのは「マルコ伝」だけだ。「キリストは彼を見据え、彼を愛した。」この中に真実があり、愛がある。人であるために、意を尽くすことであり、世界と共に共感することであり、そして、他者と接し、関係を結ぶことである。簡単に言えば、愛をもって、人を考え、人を見つめ、目を逸らさないことだ。イエスは自分を裏切ったユダを「友よ」と呼びかけている。その眼差しはペトロに対してもヨハネに対しても同じだった。イエスは神の子であり、神は愛である。「人間は情報を交換する能力があるだけでなく、共感を構築する能力もある。言葉というものは、各所にいる人たちを、共通の場に結びつける懸け橋の役割を持っている。このアプローチは、人の立場を理解することである。人は自由の中にあって、人を愛することができる。ただ真実の愛だけが、人を許し、自由にする。このように『マルコ伝』の話は終わっている。」

なぜマルコはこんな話を挿入したのだろうか。それは、この若者は財産があり、財産は人を変えるからである。財産が善の発揮を抑えるのだ。この状態で、愛するということは難しい。自らの財を忘れ、人を見つめ、愛を注ぐことが大切なのである。

ユダの得たお金は

イエス・キリストを裏切り、お金を得たユダはそのお金を何に使ったのだろうか。お金は硬貨で30枚だった。その30枚が、不思議なことに現在54枚となってヨーロッパのあちこちに保存されている。イタリアのボローニャには9枚あり、マルタ島やフランスのスワソンには各3枚、スペインでは、カステルヴィ・デ・ロザネスとヴァレンシアに2枚ずつ、遠くはヘルシンキからロードトス等まで1枚ずつ、さらには、モスクワの近くのロシアでも、クロアツィアのニンにも1枚ずつある。ユダが得たお金はどのように使われたのかは分ってはいない。ともあれ、中世にはその硬貨について色々と話が生まれたのである。その一つとしてその硬貨の生まれと流れを書いてみよう。

その硬貨はアブラハムの時代からあるものと伝えられている。父祖テラッハがアブラハムのために作らせたというのだ。それは金貨だった。それがアラビア人の手に渡り、そのお金がヨハネを買うために使用される。さらに、時が経って、シバの女王の手に入り、王様のソロモンに贈られた。しかしバビロンのイスラエル侵入によって、硬貨は壊された。それがキリスト誕生の時に、東方3博士がやって来て、処女マリアに捧げた。マリアがしばらく保存していたが、マリアはエジプト逃走の時に失ってしまった。けれどもそれは、ある羊飼いに発見された。羊飼いはそれをイエスに捧げようとしたが、イエスはそれを断り、イスラエルの神殿に捧げるように進言した。それが時のイスラエルの聖職者の手に渡り、最終的にはユダに渡ったというのである。この伝説は、硬貨の由来により宗教的重みを与える内容として、とても興味深いものだと言えよう。

「碍」の字表記問題再考（9）

おやさと研究所嘱託研究員
天理大学非常勤講師
八木　三郎　*Saburo Yagi*

英語翻訳

1598 年の「THE ELIZABETHAN POOR LAW」の文書のなかに、次の記述がある。

> classes of the destitute, whether able-bodied or impotent, children or aged, lame or blind, or otherwise “without means to maintain themselves”.（下線は筆者が強調）

この文章の意味は、貧困者の階層において健康か否か、子どもか高齢者か、そのあとに lame or blind と記され、そして自活できる手段を持っているかなどについて記述されている。この「lame or blind」が障害者の表記である。

エリザベス救貧法の時代とは大きく異なるが、徳川幕府の開国に伴って 1862 年（文久２）に出版された『英和対訳袖珍辞書』で上記の障害者表記がどのような意味になるのかを確認しておきたい。まず、「lame」は「趁跛引ク不自由ナル、不具ニナス体」となっている。「趁跛」とは、「びっこをひく、足が不自由」という意味である。この言葉は、現在では不適当用語として扱われていて目にすることはない。江戸時代と現在では言葉に対する捉え方も人権感覚も異なり、比較して解説することは難しい。趁跛は下肢障害を表す言葉として江戸時代には普通に使われていたのであろう。「blind」は、「盲目、暗キ、盲目ノ不巧者ナル」となっている。「盲目ノ不巧者ナル」という解釈はどのように理解すべきなのか苦慮するが、「盲目」自体は現在も使われている言葉であり、違和感はない。エリザベス救貧法では、障害者を一括りに表す言葉はなく、「lame or blind」と個々の障害を示す言葉で記されている。この文書において障害者に関する表記はここだけである。

次に示す資料は、1704 年の「GIVING ALMS NO CHARITY; DANIEL DEFOE’S」という文書の一部である。この資料は貧困者に対する雇用計画に関するもので、ワークハウスを設置して救済を展開する当時のイギリスの貧困政策に反対するジャーナリストのダニエル・デフォーの意見書である。この意見書によって、ワークハウス施策の法案を廃止させたという有名な文書である。

> In other words since work is available the able-bodied have no need of begging and should be ashamed to do it. The disabled or sick should have proper provision through the parishes and never be put in the position of needing to beg.（下線は筆者が強調）

内容は、働くことができる者は物乞いをする必要がなく、それを行うことを恥じるべきである。障害者または病気の者はキリスト教の教区を通じて適切な措置があるので、物乞いをする立場になる必要はない、と書かれている。

ここに the disabled という表記が用いられている。1598 年の文書では個々の障害を表す言葉で示されていたが、ここで初めて the disabled の表記を見たのである。これも『英和対訳袖珍辞書』で調べてみると、disabled の意味は「益ニ立タヌ様ニスル、弱キ妨ゲ」となっている。これ以外に他の翻訳はあるのだろうか。そこで、救護法が制定された昭和初期の英語辞典ではどのように訳しているのかを調べてみた。1927 年（昭和２）に出版された『新英和大辭典』によると、disable は「役に立たなくする」「無能にする」「不具にする」「廃疾にする」となっている。ダニエル・デフォーの意見書のなかで用いられた the disabled の表記が種々の障害を抱えた人を一括りに表す言葉として使われ、後にこの表現が障害者を表す一般的な表記となっていくのである。

『新英和大辭典』では障害関連の他の言葉については、「disability」は「廃疾」、「deaf」は「聾の」、「blind」は「盲の」と翻訳されている。聾、盲などは現在でも使われているが、訓読みにすると不適当用語として扱われている。

表記の変容

救貧法に関する文書で障害者を一括りに表す言葉が初めて用いられ、このことがわが国の法律にも深く影響を与えたと考えられる。それが、1929 年（昭和４）の救護法の「身体ノ障碍」という新たな表現であり、その後の 1949 年（昭和 24）の身体障害者福祉法で「障害者」という言葉を造りだしたと筆者は考えている。

加えてまた、the able-bodied の意味は、貧困者の労働能力の有無を示す言葉として使われているものであるが、この表現が後にわが国では障害のない人を表す「健常者」の語源となってしまったのではないかと思える。ちなみに、the disabled の表記は英文資料で今も目にすることが少なくない。その意味は身体障害者、able-bodied は強壮な、と訳されている（『コンサイス英和・和英辞典』2001 年）。

現在、国際連合が示す障害者の英語表記は「persons with disabilities」である。また 1981 年の国際障害者年に定められた障害分類の表記は、障害の状態に応じて「impairment」「disability」「handicap」などがある。これらは、それぞれの状態に合わせて使い分けられている。例えば、視覚障害、聴覚障害、肢体不自由、知的障害、精神障害などという医学レベルでの障害を「impairment」とし、その機能障害から生じる日常生活上のさまざまな困難を「disability」としている。そして社会の構成員として生きるなかで人々の偏見や差別から生じる制約や障害を「handicap」と表現しているのである。ややもすると、障害者問題は個人に帰結させて捉えがちであるが、国連は事物、慣行、観念、制度などの社会的障壁が障害者の社会参加を阻んでいることを明らかにし、個人と社会との関係性、環境因子の重要性を強く指摘している。そして、その課題を 2001 年より「Body functions & structure（心身機能）」「Activity（活動）」「Participation（参加）」の言葉をもって問題提起している。

言葉は人々の意識や人間観を表現するものである。時代の流れとともに言葉も変化し、人々の障害者観も変容する。当時は当たり前の表現として、一般的に使用されていたものが時代の流れのなかで消えていき、また新たに作られていく。

2018 年（平成 30）に衆議院文部科学委員会は、障害者の「害」の字が持つ否定的なイメージを払拭するため、別の表記を検討することを政府に求めている。加えて、参議院文教科学委員会も「碍」の常用漢字化の検討を求める決議を採択している。そこには、2020 年に開催予定であった東京パラリンピックを契機に 1981 年以降の課題となっている「障害者」表記問題を前向きに解決したいという関係者の願いが込められている。

第２次世界大戦以前は「障碍者」の表記が一般的であり、常用漢字表に「碍」の字を追加することを望む声が上がり、今も国会で継続審議されている。しかし、政府は「碍」の字の追加を認めず、保留扱いとしている。何故なのか？　その理由はどこにあるのであろうか。

[参考文献]
小山路男『イギリス救貧法史論』日本評論新社、2018 年。

天理大学おやさと研究所
2020 年度公開教学講座

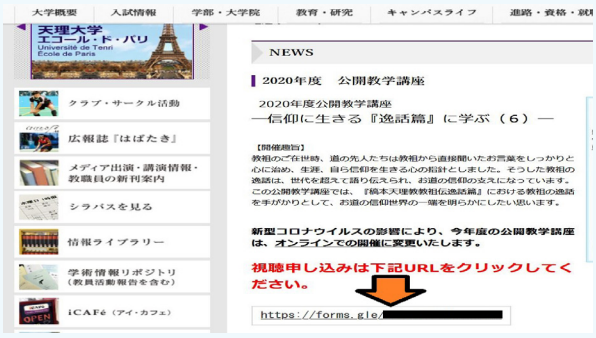
信仰に生きる　『逸話篇』に学ぶ（６）

本年度の公開教学講座はオンラインでの開催となりました。
第１回目の配信は 10 月１日～ 10 月 15 日です。

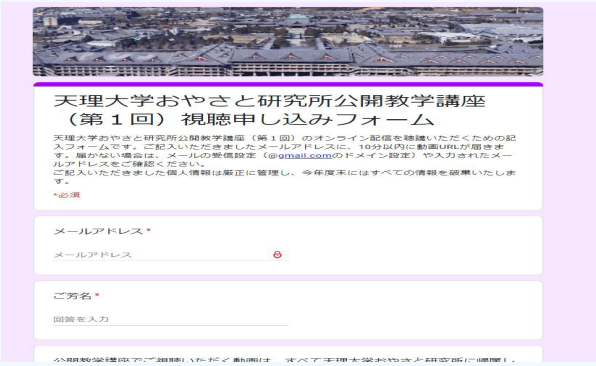
オンラインでの視聴方法

① おやさと研究所のホームページへ

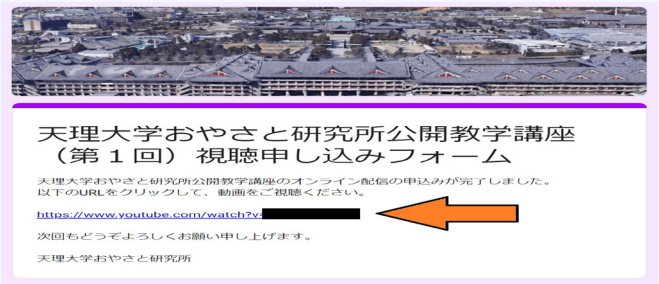
②「視聴申し込みはこちら」をクリック



③ 申し込みフォームに記入



④ 送信後、動画の URL が表示されます



⑤ URL をクリックして、ご視聴ください

第１回：
永尾教昭所長
75「これが天理や」

第２回：
佐藤孝則研究員
77「栗の節句」

第３回：
岡田正彦研究員
88「危ないところを」

第４回：
澤井真研究員
93「八町四方」

第５回：
八木三郎研究員
106「蔭膳」

第６回：
堀内みどり主任
103「間違いのないように」

グローカル天理
第 21 巻　第 10 号　（通巻 250 号）
2020 年（令和２年）10 月１日発行

ⓒ Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者　永尾教昭
編集発行　天理大学 おやさと研究所
〒 632-8510　奈良県天理市杣之内町 1050
TEL　0743-63-9080
FAX　0743-63-7255
URL　https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html
E-mail　oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷　天理時報社
Printed in Japan